

《エッセイ》

甲斐利恵子国語教室に学びて

2017.10.24-2018.01.15

達富 悠介

1. はじめに

「生きて働くことばの力」——これも甲斐利恵子のことばであり、大村はまのことばである。甲斐は国語の授業で生徒につけたい力をこのように語る。ことばが生徒の中で息づき、これからの学びとして機能する。甲斐利恵子国語教室はそんな「ことばの力」をつけることを意図した教室である。

私は昨年10月から4ヶ月間にわたって再び甲斐利恵子国語教室に通った。単元で育てる「ことばの力」とはなにか。その答えを探るため、高校受験と中学校卒業を間近に控えた中学3年生の最後の単元を追った。

2. 「国語教室通信」のこと

「国語教室通信」は甲斐が不定期に発行する通信である。号によって内容は多少異なるが、「漢字コーナー」や「今週の本棚」、「ことば」のコーナーは共通して各号に掲載されている。また、どの号にも共通して大きなスペースを占めるコーナーがある。特に名前がついたコーナーではないが、ことばに関する話題を扱う。「特集」といってもよいかもしれない。

甲斐はある号の「特集」として、「具体化」と「抽象化」ということばを取り上げた。見出しには「少年の主張をふりかえる—具体化と抽象化—」とある。学芸発表会に向けて取り組んだ「少年の主張」を振り返り、「具体化」と「抽象化」がどのような思考を指すことばなのかについて川上徹也『自分の言葉で語る技術』(クロスメディア・パブリッシング)2017年の説明を引用している。生徒が単元「少年の主張」を振り返り、改めて「具体化」と「抽象化」ということばに自覚的になることを意図したてびきである。生徒はここで「たとえば」と「要するに」ということばにも出会う。中学1年生の11月に配られた「国語教室通信」である。

生徒のことばは教科書の中だけにあるのではない。教室の中だけにあっていい。教室の中だけにあっていい。「国語教室通信」は新たなことばを教室にもってくる。そのような工夫だ。本稿で「国語教室通信」の実際を掲載することは割愛するが、『教育科学 国語教育』(明治図書)2017年4月号や全国大学国語教育学会『豊かな言語活動が拓く 国語単元学習の創造VI中学校編』(東洋館出版)2010年などに具体的な掲載がある。

3. 単元「フクシマを持ち寄ろう」の実際

私が約1年ぶりに国語科を訪れた際、教室の前には約60冊の本が積まれていた。本の題名には、「東日本大震災」や「原発」、「被災者」の文字。それらは甲斐が港区中の市民図書館から借りてきた本だった。高く積まれた「フクシマ」。ここから生徒の学びは始まった。

この単元では、ひとり1冊ずつ本を担当して、筆者の意図を読み取り、自らつくった発表資料を用いて発表するという言語活動が行われた。ただ、この単元で、生徒は担当した本を深く読み込むのではない。表紙や「はじめに」、目次、「おわりに」などをパラパラと読むことが求められた。

私はこの単元のすべての授業を観察し、甲斐と生徒の談話を文字データ化した。そして、甲斐がこの単元で生徒の「どんな力をつけることを目指したか」について、教室の談話から明らかにしようとした。

その結果、甲斐はこの単元で以下のような「力」をつけることを目指していたことがわかった。

- (1) 問いを立てる力
- (2) 筆者の意図を本文以外の情報から読み取る力
- (3) 発表資料を作る編集力
- (4) わかりやすく説明するプレゼン力
- (5) 本を選ぶ力

また、甲斐は次のような生徒の姿についても言

及していた。

- (1) 書籍に知を求める人。
- (2) 書籍のすべてを読まなくても大まかな趣旨を捉えることができる人。
- (3) 情報を構造的に組み立てながら整理し表現する方法として「情報カード」を活用することができる人。
- (4) 原発に関する問題は複雑であり、様々な角度から考えられる人。
- (5) 自分たちにとって幸せとは何か、地球に住む一員としてすべきことは何かを考えられる人。

これらのことは、黒板や「学習のてびき」に明示されることはなかったが、単元を通して何度も口頭で伝えられた。これだけ多くの「力」や生徒の姿について言及があったことがこの単元での学びの豊かさを表している。

以上の「力」や生徒の姿は、ひとつの単元によってだけで達成されるものではない。甲斐は単元びらきで「みなさんの何十年後かを見据えた単元です」と語っていた。この単元が生徒の学びの実態を捉えながら、これからの生活や人生を支えることを意図していたと考えられる。

4. 定期テストのこと

甲斐は定期テストの約1週間前になると「テストのために」という資料を配付する。甲斐はこの資料で、定期テストの範囲となる単元では何を学んだかを記している。「何をしたか」という言語活動と、それによって「何ができるようになったか」という生徒がつけた力を明示する。そして、授業と同じ形式の問題が出題されることを大まかにではあるが予告する。

甲斐が作成した定期テストをみると、単元で行った言語活動を初見の文章を用いて行う課題が必ず出題されている。生徒は「問いを立てる」や「作品の特徴を読み取る」、「情報カードを書く」、「発表原稿を書く」など今までの単元で取り組んだ言語活動に改めて取り組む。それらは、生徒が単元の言語活動を通して身に付けた力を活用することを求める課題である。

国語科の定期テストは、授業で扱った作品に関する知識が中心となって出題されがちである。し

かし、甲斐が作成する定期テストは、生徒が単元で取り組んだ言語活動と習得した力が中心に出題される。生徒が単元で習得した問題解決的な能力を「試してみる」ことで、新たな課題解決を経験し、習得した力が転移することを意図している。

5. 「あとがき」のこと

甲斐の国語教室では、単元の最後に生徒が「あとがき」を書く。「なにを学んだか」「なにをしたか」「どのような観点を得たか」など書く要素を示すこともあるが、なにも指示せず自由に書かせることもある。

「あとがき」は「あとがき集」として文集になることがある。その場合、「あとがき集」を読み合う活動が単元の最後にとられる。また、生徒は「あとがき」を単元末だけではなく、半年ごとにもそれまでの学習を振り返って「あとがき」を書く。ひとつの単元に絞って振り返る生徒もいれば、いくつもの単元を振り返る生徒もいる。こうして書かれた「あとがき」はすべて「学習記録」に綴じられる。

「あとがき」を書くことによって「学びを客観的に語ることばを獲得することができるんです」と甲斐は語る。生徒が単元の学びを振り返ることをてびきするために、授業中の談話を文字データ化した資料やよく書けている生徒の授業記録を配ることもある。「活動しっぱなしで終えたらもったいない」。豊かな言語活動だからこその工夫である。

付記

第3章は、「東京都青年国語研究会 平成29年度冬の勉強会」における発表(発表題目「単元「フクシマを持ち寄ろう」における学びの実際」)の一部を加筆・修正した。

(横浜国立大学大学院教育学研究科)